

第5章 プロフェッションの職業奉仕

例会の会務も順調に進み、卓話の時間となった。

「それでは、本日の卓話は一月の職業奉仕月間に因みまして、職業奉仕委員長の戸高会員にお願いしたいと思います。戸高会員よろしくお願いいたします」

「皆さん、こんにちは。戸高です。ただいま、三上幹事さんからご紹介がありましたとおり、今月は職業奉仕月間でありますので、私自身の職業を通じて、プロとしての職業奉仕について考えていきたいと思えます。なお私の若いころは、公認会計士として、上場会社の大手企業をはじめ、公益法人や学校法人などの会計監査に携わっていましたが、独立開業後は税理士としての業務を中心に行っております関係上、私の職業分類は『公認会計士』ですが、税理士業務も含めたプロフェッション（専門職業人）について、話を進めてまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

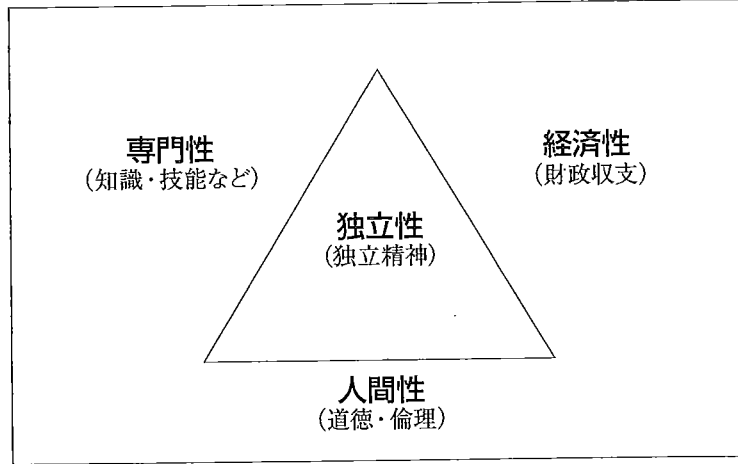
税理士と税務調査官との共謀による脱税および汚職事件、二元国税局長官の税理士事務所脱税事件、監査法人の代表社員たる公認会計士の不正汚職事件など、税理士や公認会計士、弁護士そして医師などあらゆるプロフェッションの不正事件が後を絶ちません。こういった事件が明るみにされるたびに、新聞紙などに大きく報道され、職業倫理の重要性が叫ばれるのであります。これは、専門職業人がプロフェッションとして、社会的・公共的役割の期待が高く、しかも社会的地位が（そう

いう見方を許していただければ）比較的高く見られるところの所以でしょうか。

税理士の場合、税法という複雑かつ難解な法律を中心として、さらには会計学等の社会科学の分野を合わせ持ち、これを基礎として税務プロフェッションとしての社会的期待を担っているわけであります。税理士法第一条には、税理士の使命として、『税理士は、税務に関する専門家として、独立した公正な立場において、申告納税制度の理念にそって、納税義務者の信頼にこたえ、租税に関する法令に規定された納税義務の適正な実現を図ることを使命とする』と掲げられているように、この条文そのものが税理士の生き方といえます。また、『独立した公正な立場』とか『納税義務者の信頼にこたえる』あるいは『納税義務の適正な実現を図る』といった公正・信頼・適正の言葉は、いたって倫理的であります。他の専門職業においても、その使命の中に、大変倫理的な言葉があります。たとえば、弁護士の場合、第一条に『弁護士は、基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする。二、弁護士は、前項の使命に基づき、誠実にその職務を行い、社会秩序の維持及び法律制度の改善に努力しなければならない』と謳ってあります。これなどは全文が倫理そのものといっても過言ではないと思います。このように従事する専門職業には、必ず遵守すべき使命や義務が伴うものです。

さて、税理士は全国で七万五千人以上おり、コンピューターが発達した現代では、記帳および決算中心の税理士事務所の運営は、大変厳しいものとなっております。納税義務の適正な実現を図るのに、正しい記帳および決算はその基礎をなすものとして大変重要であります。会計ソフトの一般企業への普及は税理士業務の合理化以上に税理士事務所の経営を脅かす存在となりました。コンピューターの発達による影響は、他の専門職業人にも多かれ少なかれ及んでいると思えます。とり

専門職業人の性質バランス



わけ昨今のA Iの開発はすさまじいものがあり、将来税理士業務もなくなってしまうような報道も聞かれます。専門職業人といえども他の職業と同様に、経済的にも成り立っていかなければ、よりよい仕事ができないと思います。孟子の言葉に、『恒産なければ、よって恒心なし』とあるように、現実きちんと生活していけるだけの収入や財産、いわゆる『恒産』がないと、不動の道義心、倫理すなわち『恒心』は保ちにくいのであります。『経済と道徳』、あるいは『経済と使命や義務』、『経済と奉仕の精神』とのバランスをうまくとりたいものです。なおロータリーの奉仕の理念において、ポール・ハリスは『奉仕の理念(理想)』というのは、物の過程の最初に奉仕を置くものであり、受ける物質においてでなく、まず与えるべき奉仕に着眼すべきである。物質を眼前に近く置けば見透しは困難となる。そしてその最も愚かな方法は金銭に集中することである』と『THIS ROTARIAN AGE』ロータリーの理想と友愛の書で述べています。ロータリーが掲げる崇高な標語『超我の奉仕(Service above self)』の意味する『奉仕第一、自己第二』、これに基づいて行動することは簡単なものではありません。しかしこの奉仕の理念の本質的意義はしっかりと押さえておかなければなりません。

したがって専門職業人としては、奉仕の理念と独立性つまり独立精神をもとにして、専門知識や専門技術といった『専門性』と収支の成り立ちである『経済性』、およびその職業を本来の職業あらしめる倫理、すなわち『人間性』の三位が一体となって初めて、その専門職業の社会的価値が認められるものと考えます。その専門性、経済性、人間性(倫理性)のバランスのとれた姿、すなわち正三角形となるような職業の本質をもたらすことが大切であると考えます。しかしながら、経済的な面において公益を考えず欲望が強くなって『貪欲』になりますと、倫理、人間性が影をひそめ、

不正三角形となってしまいます。世にいわれる『貪、瞋、痴』の貪です。このように貪に偏った経済中心の専門職業人、あるいは有頂天になった専門知識だけの専門職業人や、またお人よしで専門活動力の弱い、つまり頼りない専門職業人、それぞれ偏りのある者は本来の専門職業人とはいえないものと考えます。

税理士は、毎年のように改正される複雑かつ膨大な税法の解釈と適用に追われ、かつ、経済不況の影響などにより、迷いや焦りや怒りが生じて、もしかして人間本来のあるべき姿、あるいは本来の専門職業人としての内面的かつ倫理的な問題とうとんじる傾向があるのではないかと懸念するところであります。公認会計士然り、弁護士然り、その他専門職業人すべて然りではないでしょうか。

この倫理の『倫』という字は、論理の『論』と同じく『侖』という字を持っています。この『侖』という字の成り立ちは、昔の人が文字を書いていた竹の札を横につないで集めた字形で、文字を書

いた竹札を順序よく並べてまとめることを意味したようです。したがって、『論』は筋道の通った言葉の意味し、『倫』は人の間（なかま）の秩序を表す意味だそうです。この倫の文字に、物事の筋道、ことわりなどを表す『理』という字が加わって、『倫理』という言葉がつくられたわけです。倫理は、人と人との間柄の正しい筋道としての人の理法、すなわち道理を意味するわけですから、人間としてもプロフェッションとして専門職を遂行するうえでも、必要不可欠な要件であるわけであります。ロータリーではとりわけこの倫理を重要視しており、ロータリー運動は『倫理運動』とも言われるほどであります。

さて、税務やその他の専門業のプロとして、税理士など専門職業人はそれぞれ社会の期待を担っているわけですが、それではプロフェッションとはそもそもどのようなようにとらえたらよいのでしょうか。ある会計学者の論文を参考にして、お話ししていきたいと思えます。

『プロフェッション』という呼称は、中世ヨーロッパにおける知識人階級と呼ばれる聖職者・医者・弁護士などを指す用語として生成してきました。これらプロフェッションと称される職業は、その語源でもあるプロフェス（Profess）、つまり信仰・告白するという語義からも推測されるように、キリスト教の教えと密接に結びつくとともに、当時の大学教育の根幹をなす神学（Theology）、医学（Medicine）、法学（Law）の存在に基礎を置くものであります。すなわち、大学教育の中で育ってきた『知的（Learned）』とも称されるプロフェッションは、強い宗教的影響の下に置かれており、またそのことで宗教的倫理を基本精神とした自らの道徳律としてとらえられる職業遂行上の倫理観によって、それぞれのプロフェッションが形成されるようになったようです。

こういった古典的なプロフェッションの場合、聖職者にあつては悩める魂の救済として、医師にあつては肉体の疾病の治療として、弁護士にあつては人間同士の紛争の処理解決として、それぞれ人間社会における働きかけは異なつてはいるものの、いずれも人生や社会の治療、回復を目的としている点が特徴的であります。しかし単に、こうした理由のみで、社会的にも彼らがプロフェッションとして排他性を有してきたわけではありません。

歴史的に見て、プロフェッションの基本精神に大きな影響を与えたと思われるもう一つの要素として、ジェントルマン（Gentleman）の概念を取り上げなければなりません。中世の騎士道時代に形成され、現在においても決して消滅していない紳士道の精神であります。そこでの理念が、社会奉仕や非営利活動を行動づけていたこともさることながら、個々人は自尊心を保ち、社会関係において相互の信頼を保持するために、基本ともいえる名誉を重んじていたのです。このようなことでプロフェッションは、社会的にも高度な倫理観を備えた存在として、認知され権威づけられてきたのであります。

このようにプロフェッションの動機が、神への奉仕という信仰深い宗教的なものであったこと、また英国の紳士道の流れを汲むものであるということは、プロフェッションの職業倫理を考えると、大きな意味を持つものと思えます。つまりプロフェッションが、高度に専門化されたものであると同時に、より倫理性の高い存在としてイメージされるからであり、またそのように社会的に期待されるからであります。プロフェッションは、高度な専門知識と技術を誠実に駆使し実践するばかりでなく、自己の良心に従い十分なる注意を働かせて、最良適切な判断がされるよう期待されているのであります。

さて、プロフェッションとは、ある定義によりますと『科学または高度な知識に裏づけられ、それ自身一定の基礎理論を持った特殊の技能を、特殊な教育または訓練によって習得し、それに基づいて、不特定多数の市民の中から任意に呈示された個々のクライアントの具体的要求に応じて具体的活動を行い、よって社会全体の利益のために尽くす職業である』といわれております。大変難しく回りくどい定義です。要するに、ある特定の専門分野において、理論と技能が修得され、社会の認知を得て実践に生かされ、社会全体に有益となる職業ということだと思えます。

このような定義の裏づけとして、ある職業がプロフェッションと呼ばれるための要件は、通常次の五項目が挙げられているようです。

第一には、『その業務について一般原理が確立し、この理論的知識に基づいた技術を習得するために、長期間の高度の教育と訓練が必要であること』であります。つまり専門知識の体系が確立されていることです。たとえば、医師には医学、弁護士には法律学、公認会計士には会計学というように特定の学問が基礎となっております。税理士の場合、税法という法律学を基礎として、会計学という社会科学も合わせ持っているのが特徴です。

さて、ロータリーではどうでしょうか？

奉仕の専門学は、人間学つまり倫理学であったり、社会学や宗教学であったりしますが、これを学ばずしては本物のロータリアンとはいえないかもしれません。私などは失格ロータリアンです。

第二には、『免許制度が採用されていること』です。これは正式な承認がされるということです。つまり、ある人が、その職業に必要なとされる知識を持っているかどうか外見的には判定しえないので、

一定の試験などに合格した者のみがある専門職業に従事することを認め、社会的信頼を付与していくとするものです。医師は医師の国家試験があり、弁護士は司法試験があり、同様に公認会計士や税理士も国家試験があります。

参考に、ロータリーではご承知のとおり、入会試験はありません。しかし、職業分類上の資格要件や、候補者の善良さや高潔さという人格、リーダーシップあるいは職業上および地域社会での良き評判並びに意欲的に奉仕しようという姿勢などの見地から、厳正な入会手続きがとられています。現実はまだ厳しいということがなくなりましたね。

第三には、『職能団体が結成され、その団体について自律性が確保されていること』です。これは自治権が確保されることを意味します。その職能団体の自律性とは、その団体が自ら規範を立て、会員がその規範に従って行動することです。弁護士、公認会計士、税理士は、それぞれ会や協会を作り、さらに会則や規則など（倫理規定など）を作って業務や行動の規範としております。

ロータリーにおいても各クラブに自治権が確立され、国際ロータリー（RI）の定款や細則、あるいは各クラブの定款や細則などさまざまな規定によって運営されているのと同様であります。また昨今の規定審議会の改正で大幅にクラブの柔軟性と自由性が認められましたが、その話については今回割愛させていただきます。

第四には、『自己の営利以上に公共の利益を目的とすること』です。これは公共の利益を志向する一連の価値観を意味しています。つまりプロフェッションとしての業務が、営利主義に陥ることなく、名誉ある天職・公職として社会の利益へ奉仕することをその眼目としております。

ロータリーにおいても、まさにこの点こそが『超我の奉仕 (Service above self)』のロータリー精

神と相通するものであります。先ほどもお話ししましたとおり、現実問題として大変難しい問題であります。これをわれわれは志していかねばなりません。

最後に、『プロフェッション』としての主体性、独立性を有することです。プロフェッションは自由職業人であって、いかにその職業団体に所属しているとはいえ、自己の主体性や独立性なくしてその職業の遂行はできないのであります。これは弁護士、公認会計士、税理士など皆に共通する重要な職業倫理のテーマであります。とくに公認会計士は、会計監査に臨んで、クライアントとの関係において経済的にも精神的にも特別利害関係のないものによって行われなければならない、この独立不羈なる精神が最も重要とされるものであります。

ロータリーにおきましても、一人ひとりの奉仕の精神が尊ばれ、いわゆる『*Right*』としての主体性が望まれるのであります。意味をよく理解せず奉仕活動すればよいとか、金さえ出せばよいといったものではなく、奉仕の本来の意味をよく理解し、そのうえで自ら行うことが大切とロータリーは教えています。

以上のように、プロフェッションの条件を見てまいりましたが、ロータリーにおきましても、かなり目的条件にかなっていることがわかりただけたと思います。われわれロータリアンも『奉仕のプロフェッション』として、日常の活動を心していかねばならないと思います。また、皆さんの職業もかなりプロフェッションの条件が当てはまると思いますので、各自ご確認いただきたいと思います。

プロフェッションの立場から、職業奉仕あるいは職業倫理の一端をお話しさせていただきました。が、『徳は知である』と古くソクラテスが主張したように、プロフェッションとしての専門知識に精通し、よくこの知を働かせ、かつ社会にとつてよく生かしうるものがそれぞれプロフェッションの役割と心得ます。以前、守道さんから聞いた話ですが、自己の専門職業を、*Labour* や単なる *Job* あるいは *Work* ととらえずに、天職・使命・神の思召しの意味としての *Vocation* というとらえ方をすることが大切だと思えます。職業奉仕は原語では『*Vocational service*』です。天職としての奉仕、使命としての奉仕を心がけないといけないわけです。自己の職業を愛し、自己の職業に奉仕し、自己の職業の使命を果たしていくこと、すなわち社会の欠くべからず役割としてその存在価値の大きなことを認識し、まことにその職責を尽くしていくことが、専門職業倫理の基本的あり方と考えます。なお守道パストガバナーがガバナー年度中に書かれたガバナー月信に職業奉仕に関連したガバナーメッセージ「職業奉仕・事業改革の偉人世伝」は大変参考になりますので、いま一度読み直してみてください。

以上を持ちまして、卓話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました」

「戸高会員ありがとうございました。それでは吉本会長、お礼のご挨拶をお願いいたします」

「ただいまは、専門的に職業奉仕を説明していただき、またロータリアンも奉仕のプロフェッションにならなければいけない、とご指摘され、耳の痛いところです。戸高会員、ありがとうございました。今後のロータリー活動の参考にさせていただきます。それでは本日の例会、これにて終了いたします」